

將軍姫君の婚礼の変遷と文化期御守殿入用

——尾張藩淑姫御守殿を事例として——

吉 成 香 澄

はじめに

近年、武家女性の研究は大名家の奥向を中心に広がりを見せている。とくに大名家同士の婚姻については松尾美恵子氏、高橋博氏、稲垣知子氏によって、通婚圏と家格の問題、婚姻交渉人、持参金問題などがとりあげられ、その実態が明らかとなってきた⁽¹⁾。また大名家の奥向、養子・相続過程に着目して大名間関係や幕藩関係をとらえる研究が柳谷慶子氏、大森映子氏などによって行われ⁽²⁾、さらに奥附役人や女中の研究も進んでいる⁽³⁾。

しかし大名正室といっても、將軍家の姫君が⁽⁴⁾大名家へ結婚した場合、婚姻後の姫君は御守殿⁽⁵⁾といわれる御殿に生活し、婚姻後も姫君として扱われるなど、大名家同士の結婚とは異なる点が多い。よって將軍姫君の結婚について研究する際、藩主正室として見ていては解明できない部分が生じるのではないかと考える。

なお「御守殿」という言葉については、徳川將軍家の姫君が①御

三家・御三卿に嫁いだ場合は御守殿といい、そのほかの大名に嫁いだ場合は御住居⁽⁶⁾といった⁽⁵⁾とも、②「三位以上のもに嫁したものを御守殿とよび、四位以下に嫁したものを御住居と称した」⁽⁶⁾ともいわれる⁽⁷⁾。本稿においては、徳川將軍家の姫が嫁ぎ先の大名邸で生活する御殿空間をさす言葉として、御守殿を使っていく。

御守殿についての先行研究には、文政八年の峯姫御守殿の経費を紹介した伊東多三郎氏、御守殿の公儀付人の召し返しを論じた大塚英二氏⁽¹⁰⁾、御守殿の空間構造に着目した氷室史子氏の論文があげられる。だが残念ながらどなたも継続して御守殿を研究しておらず、研究の蓄積は少ないといわざるをえない。

以上のような現状において、まずは將軍姫君の結婚を総合的に把握する必要があるのではないかと考える。そこで本稿では、徳川政権が安定した時期とされる家光から幕末慶喜までの姫君の結婚の事例をまとめ、その変遷について分析を行う。次にその背景を考察したのちに、御守殿での実際の入用を見ていきたい。

なお本稿では学習院大学図書館所蔵の『御守殿方留』『御守殿諸書付留』を主に用いて、十一代将軍家斉の息女で十代尾張藩主徳川斉朝正室となった淑姫の御守殿の事例を見ていく。この史料は、淑姫御守殿の御用承り掛の若年寄と、淑姫の附人の頭取である御用人とが相互に連絡した際の御用記録である。

第一章 姫君婚礼の変遷

第一節 姫君の結婚

徳川将軍家の姫君の結婚は、将軍からの縁組の仰出によってはじまる。この仰出から婚姻の規式終了までのそれぞれの段階で、幕府は大目付を通じて諸大名や諸役人に通達を出して公表し、同時に祝儀献上を求めた。これらの通達は『御触書集成』⁽¹³⁾で確認できる。

表一と表二は『徳川諸家系譜』⁽¹⁴⁾と『御触書集成』をもとに、将軍家光以降の姫君の結婚の事例を集めたものである。なお、婚礼に至る前に死去した姫は表から除き、婚礼をする前に嫁ぎ相手が死去した場合、その姫の最終的な結婚のデータを収集した。

表一では姫君の結婚の相手、将軍からの縁組仰出の日、婚家へ向かう出立（入興／引移）日をあげた。⁽¹⁵⁾縁組仰出から婚礼までの年月は一定していないが、その理由は、当事者の病氣や年齢など個々の事情によるものである。また、嫁ぎ先の大名邸のなかで、姫君が生活する住居を幕府の呼称を「住居呼称」の欄に入れた。

表一をみると、「移動の表現」が家斉娘の峯姫から「引移」に変わっている。『日本国語大辞典』によると、「引移」とは「物や事柄が他に移ること。特に、住居・居場所が他へ移ること。引っ越し。」

とあり、「入興」と異なり婚礼の意味は特に含まれていないようである。また峯姫の次に結婚した浅姫からは「住居呼称」が「御守殿」から「御住居」に変わっている。この呼称変化は幕府からの達によるものである。なぜこのような変化が起こったのか。その点は、浅姫から現れる「万端御省略」あるいは「万端御手輕」という達書と関わるのではないかと推察する。

次にあげる表二は、姫君の入興時に参列する幕府役人へだされた達書をまとめたものである。

姫君の婚礼行列には、留守居や大番頭をはじめ、あらかじめ若年寄などの中から、興渡や貝浦渡などの婚礼の規式上の役に当たった人々や、姫君附人が供連として嫁入りの行列に連なる。この行列に加わらない幕府役人は、江戸城の台所前、玄関前や下乗橋で姫の出興を見送った。

表二をみると、婚礼当日の着用は「無地熨斗目、半袴」であったものが、家斉息女の花姫のときから「服紗小袖、麻上下」にかわっている。

熨斗目とは小袖のひとつで、『徳川盛世録』⁽¹⁶⁾によると、「大紋下、直綴下、布衣下、素袍下または麻上下（長袴とも）下、編綴下等に用う。士以上（槍を持たすべき身分）の格式をゆうするものにあらざれば着用するを得ず。」というものである。熨斗目とは織物の一種で、経生糸に緯を練糸で織ったものをいう。腰明と無地との種類があり、腰明は腰の部分のみに織縞のあるもので、無地は総無地で縞のないものをいう。無地熨斗目は婚礼と葬儀のときに着用するので、婚礼のときは鉄色の無地熨斗目を着用するものとされていた

【表1】婚礼当日に関する達の内容

將軍	家光	綱吉	吉宗	家治	家齊	家慶																		
姫	龜姫	千代姫	鶴姫	通姫	鶴姫	八重姫	松姫	竹姫	利根姫	種姫	淑姫	峯姫	浅姫	元姫	文姫	盛姫	和姫	溶姫	末姫	喜代姫	永姫	泰姫	精姫	線姫
結婚相手	前田光高	尾張徳川光友	一条通房	一条教輔	紀伊徳川綱教	水戸徳川吉孚	前田吉徳	島津繼豊	伊達宗村	紀伊徳川治宝	尾張徳川斉朝	水戸徳川斉脩	越前松平斉承	会津松平容衆	讃岐松平頼胤	鍋島斉直	毛利斉広	前田斉泰	浅野齐肃	酒井忠字	一橋斉位	池田齐訓	有馬頼咸	水戸徳川慶篤
殿席	—	—	—	—	大廊下	大廊下	大廊下	大廊下	大廊下	大廊下	大廊下	大廊下	大廊下	溜間	溜間	溜間	大広間	大廊下	大広間	大廊下	溜間	大廊下	大廊下	大廊下
官位	従三位	従二位	正二位	正二位	従二位	従三位	従四位	従四位	従四位	従二位	従二位	従三位	正四位	正四位	正四位	文政2,12,3	文政6,6,18	文政6,4,11	文政6,6,18	文政6,6,18	文政5,6,21	文政8,2,6	天保2,9,16	嘉永元
縁組御出日	寛永9,12,13	寛永16,9,21	寛永8,9,21	正保4,10,19	天和元,7,10(18)	元禄10,4,18	宝永5,4,9	享保14,6,4	天明2,2,7	寛政8,2,5	享和3,6,18	文化14,9,27	文化14,4,15	文政2,12,3	文政2,12,3	文政8,11,27	文政12,11,27	文政10,11,27	天保4,11,15	天保3,12,1	天保6,11,15	天保11,12,3	嘉永2,12,4	嘉永5,12,15
入興／引移日	寛永10,12,5	正保2,11,5	寛永9,11,5	慶安2,11,21	貞享2,2,22	元禄11,6,13	宝永5,11,18	享保14,12,11	天明7,11,27	寛政11,11,22	文化11,11,23	文政2,11,29	文政4,2,23	文政9,11,27	文政8,11,27	文政12,11,27	文政10,11,27	天保4,11,15	天保6,11,15	天保11,12,3	天保11,12,3	天保11,12,3	天保11,12,3	天保11,12,3
移動の表現	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	入興	引移	引移	引移	引移	引移	引移	引移	引移	引移	引移	引移
住居呼称	—	御守殿	—	—	御守殿	御守殿	御守殿	御守殿	御守殿	御守殿	御守殿	御守殿	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御住居	御守殿
													文化4,6,21	文化14,4,15	文政3,11,3	文政2,12,3	文政6,12,4	文政6,12,4	文政6,6,18	文政8,9,11	文政5,6,21	天保2,9,16		
備考													御省略御達	御住居之手軽之旨御達	御住居之手軽之旨御達	御住居之手軽之御達	御住居之手軽之御達	御住居之手軽之御達	御住居之手軽之旨御達	御住居と称せらる旨	御住居	御住居	御住居	御住居

参考文献…『徳川諸家系譜』『御触書寛保集成』『御触書天明集成』『御触書天保集成』『幕末御触書集成』より作成。

(*) 安政二年から御守殿となる。

【表二】婚礼当日の供揃時刻と着用物

將軍	結婚先	結婚年月日	供揃時刻	着用物
綱吉	紀伊徳川綱教	貞享2.2.22	—	—
八重姫	水戸徳川吉孚	元禄11.6.13	—	—
松姫	前田吉徳	宝永5.11.18	—	—
吉宗	鳥津繼豊	享保14.12.11	五時	無地熨斗目、半袴
利根姫	伊達宗村	享保20.11.28	五時	無地熨斗目、半袴
家治	紀伊徳川治宝	天明7.11.27	五時	無地熨斗目、半袴
家齊	尾張徳川齊朝	寛政11.11.22	五時	無地熨斗目、半袴
浅姫	越前松平齊承	文政2.11.29	四時	服紗小袖、麻上下
元姫	会津松平容衆	文政4.2.23	四時	服紗小袖、麻上下
文姫	讃岐松平頼胤	文政9.11.27	四時	服紗小袖、麻上下
盛姫	鍋島齊直	文政8.11.28	四時	服紗小袖、麻上下
和姫	毛利齊広	文政12.11.27	四時	服紗小袖、麻上下
溶姫	前田齊泰	文政10.11.27	四時	服紗小袖、麻上下
末姫	浅野齊肅	(天保4.11.15)	月次御礼相濟	服紗小袖、麻上下
喜代姫	酒井忠学	天保3.12.1	月次御礼相濟	服紗小袖、麻上下
永姫	一橋斉位	天保6.11.15	月次御礼相濟	服紗小袖、麻上下
泰姫	池田斉訓	天保11.12.3	四時	服紗小袖、麻上下
家慶	田安慶頼	(天保10.8.7)	—	—
精姫	有馬頼咸	嘉永2.12.4	—	—
線姫	水戸徳川慶篤	嘉永5.12.15	—	—

参考文献…『御触書寛保集成』『御触書天明集成』『御触書天保集成』『幕末御触書集成』より作成。

という。

服紗は麻上下（長袴ではない）、継上下、編綴または羽織袴の内に着るものとして用いられたという。熨斗目を着ることが許されなものの、熨斗目を着用すべき場に出たときに麻上下や編綴の内に

用いた。

なお「ふくさ」という言葉について『貞丈雑記』言語の部には「（ふくさ小袖、ふくさ吸物、ふくさ帯など）是等の詞、皆、本式にあらざる物にはふくさと云ふ事を付けていふなり。これらは皆、今世の詞なり」とある。ここでも服紗は本式よりも格が下がるものであるとしている。

また、麻上下というのは、本来は諸麻で製作されたもので、通常は青色か兼房色の地に、小紋を白色で染め出した。上には背に一つ、両肩の前に一つずつの紋を入れ、袴には腰板に一つ紋を入れた。婚礼には褐色に子持筋を付けたものを着用した。なお上下自体は通常の礼服として武士・町人ともに着用した。中に着るものは、夏は白帷子・染帷子で、冬は熨斗目・服紗であった。

麻上下には長上下と半上下の区別があった。長上下は袴の裾を長く引いて足を覆うものであり、長袴と短称する。よって、麻上下というとき、通常は半上下のことをいう。なお、長袴は御目見以上（と富士見宝蔵番・天守番）の幕府役人らが着用を許され、それ以外の人々が長袴着用の場に出たときは半上下を用いた。

以上このことから、熨斗目と服紗では着用に差が設けられていたことがわかる。そして、表二から明らかに変わった変化というのは、姫君婚礼参列時の着衣の格下げであるといえる。

表一では、入興、引移の表現の変化と、御守殿、御住居の変化をあらわすように「万端御手軽」という旨が出ていた。また表二では参列時の衣服の変化は、格下げであることが判明した。ここから、入興に対する「引移」、また御守殿に対する「御住居」というのは、

格下げの表現であることがうかがえる。

また、「御守殿」「御住居」の違いについて、はじめにいくつかの説をあげたが、表一をみると、官位が従四位である島津継豊や伊達宗村の場合でも「御守殿」と称している。このことから、もともと御守殿を称えるのに官位は問題ではなかったのではないかと考えられる。おそらく、官位による基準を設けたのは「御住居」という呼称ができた家斉以降のことであろう。

第二節 婚礼の省略化

前項において、表一・二から、家斉娘の峯姫・浅姫の婚礼から変化が生じていると述べた。しかし史料一をみると、内々には家治養女の種姫のときから変化が現れてきたようである。

【史料一】『御触書大明集成』五三八 天明七年二月

大目付え

種姫君様当冬中紀伊殿館え御引移、当日御婚姻御整可被遊旨、先達て被仰出候得共、御引移と申方にては無之、直ニ御入輿御婚姻御整可被遊旨被仰出候、尤万端御手輕と申儀は最前被仰出候通ニ候間可被得其意候、

種姫は田安宗武の娘で、將軍家治の養女となり、天明七年（一七八七）十一月二十七日に紀伊徳川岩千代（のちの十代藩主治宝）と結婚した。史料一は、種姫の婚礼はすでに「紀伊殿館へ引移、当日のうちに婚姻を御整わせる」と仰せ出されたが、と前書きして、

「引移ではなく、入輿の上婚姻を整わせる旨である」と述べている。

史料一の文中にある「先達て」というのは、天明六年六月に出された「来年、種姫君様御引移御当日、御婚姻被遊御整候、此段向々え可被相達候²⁰⁾」というものである。しかし、史料一では「引移」を「入輿」に訂正しており、同年九月には「種姫君様当十一月中、紀伊中納言殿え可為御入輿之旨被仰出候、此段向々え可被達候」と、改めて達書がでている。つまり、はじめは種姫は「引移」を行うことになっていたが、後に「入輿」に改められた。結果的に「入輿」が行われたので、表一で参考にした御触書集成にはあらわれなかったのである。

次にあげる史料二は、家斉娘の峯姫の結婚についてのものである。峯姫は寛政十二年（一八〇〇）四月四日におとせの方を母に誕生した。享和三年（一八〇三）六月十八日に水戸徳川治紀の嫡子鶴千代との縁組が仰せ出され、文化二年（一八〇五）二月十三日に結納を行った。同年三月十三日に水戸邸へ引移のことが仰せ出され、翌十一年十一月二十三日に水戸邸へ引移り、婚礼を行った。

【史料二】『憲法類集』文化十年二月二十九日

堀田摂津守御渡

姫君様方御入輿式并御守殿之儀、享保之度惣而御減省之御事には有之候得共、稀々之儀故、未何角御大造之事に思召、今度峯姫君様御婚礼に付而は、総而之御取扱、從來之御格式を令合、御省略など中様之儀に而は、自、為差御差別も無之様可相成候間、別段に御末若様方御形付之御恰好相立、御守殿入用等、惣

而先々に而往々手張不中、一通り之簾中方妻女共相替儀無之相
濟候程に取極候様にとの思召に而、品々厚き御沙汰も有之候間、
一同右心得を以可成丈省略いたし、取調可被申聞候事

この史料の冒頭にある「御入興式并御守殿之儀」であるが、「御
守殿」が姫君の嫁ぎ先で生活する御殿をさすことばであるから、
「入興式」は婚礼行列や婚姻の規式をさしていると思われる。

つまり、姫君の婚礼やその後の生活のことは、享保期に総じて
「減省」となったが、⁽²²⁾姫君の結婚というのは「稀々之儀」であるた
めに、いまだになにかと御大層になっている。この度の峯姫の婚礼
では従来の格式を見合わせ、省略というような形とさしたる差別も
ないようにするという内容である。

ここから、峯姫の婚礼は「省略」と同様に行われることになった
ことがうかがえる。そして、この次に結婚する浅姫に「御省略之御
達」が出され、それ以降の姫君の結婚で「万端御手輕之旨」が出る
など、省略が表だってくる。この傾向は、史料一でみた種姫からう
かがえるが、本格的に姫君の婚礼が変化したのは峯姫を境にしてい
るといえる。

なお、松平春嶽は「將軍家姫君様方御嫁入ハ、御婚礼と申事ハ余
記憶する所ニテハ僅に御二人なり。俊明公御養女（田安宗武卿の御
子）種姫君、文恭公の御嫡女淑姫君ハ、真の御婚礼式頗鄭重ニして
アゲ興ニテ被為入、女中御供の人数も頗多く、御附用人も多く、都
て御手重のよし。其後ハ専ら御節儉を旨とせられ、御三家・御三卿・
大名を論せず、御婚礼式を廃せられたり。」と後に述べており、幕

末期にはすでにこのような認識がなされていたこともうかがえる。

第三節 婚礼と幕府財政

では、姫君の結婚が省略となった理由はどこにあるのだろうか。

そこには当時の幕府財政状況が大きく関わっていると考えられる。
大口勇次郎氏によると、寛政→文化期は禁裏普請、日光東照宮修復、
河川修復費用がかさんだ上に、東蝦夷地直轄化による入用が加わり、
幕府財政が大きく悪化した時期であるという。

さらに、この時期の臨時経費の分析をみると、支出全体の三百五
十七万七千両のうち五％にあたる十八万九千両が「大名拝借金」と
なっている。拝借金とは幕府が財政援助のため無利子で貸与する金
錢で、十ヶ年で返済するのが原則であった。⁽²³⁾ 拝借を希望する者は、
申請時に見積もりを提出し、勘定所の審査のうえで貸与された。貸
与対象は天災や火災による領地・藩邸の復興を必要とする大名家が
主だが、徳川將軍家親族大名には、「勝手向難渋」による貸与が行
われていた。⁽²⁴⁾ このうち、淑姫の入興を理由として寛政十年に五万両、
峯姫入興を理由としたものが文化十年と十一年にそれぞれ一万両が
貸与されている。

また、おなじく臨時経費のなかの「奥向入用」は八万四千両を計
上しており、そのうち淑姫入興によるものが寛政十一年に二万二千
両と翌十二年に一万二千両、峯姫引移と簾中御座のために文化十一
年に三万一千両となっている。

これらを見ると、幕府財政全体が赤字傾向にあるなかで、姫君の
婚礼に多額の金銭をかけることが難しくなってきたであろうことが

推察される。また、天明七年七月に紀州藩が種姫入興につき三年間七千両ずつの手当金⁽²⁷⁾を貸与されているが、これ以降、御三家と一橋家からは姫君の御守殿入用のための拝借金貸与願がふえていく。これにより幕府は婚礼の費用だけでなく、その後の姫君の生活入用費まで拝借金という形で支出することになった⁽²⁸⁾。

小括

將軍姫君の婚礼は、家斉の娘から「入興」が「引移」となり、「御守殿」が「御住居」と格下げが生じた。こうした省略とそれによる婚礼に関わる呼称の変化は、家治の娘種姫の段階でうかがえるが、その時点での表立った変化は結果的に生じなかった。本格的に省略となったのは、家斉の娘からである。このときにはすでに、御三家と一橋家は「勝手向不如意」の状態で、姫君の生活費用を理由に幕府から拝借金の貸与を求めるようになっていた。

これまで幕府財政を論じるなかで、いわゆる「大奥経費」として一括に扱われてきたなかに、將軍息女の御守殿への合力金が含まれていた。しかし、今回の事例にあるような嫁ぎ先の藩による「御守殿入用にあてるため」の拝借金は、藩による拝借金ではあるが、間接的に御守殿への経費として使われており、幕府の側もそれを承知していた。よって、「大奥経費」以外のところからも姫君に関わる経費が生じていたといえる。また、本来の拝借金は天災による領地復興や、藩邸の火災消失にあてるためのものであったにもかかわらず、この時期には、御守殿入用のための拝借金が許容されるなど、その性格が変化している。

入興や御守殿入用を理由とした拝借金の願いは尾張藩にかぎらず見られる。淑姫以降の峯姫からは本格的に「省略」が始まったと指摘したが、それは各嫁ぎ先からの拝借金願いが幕府財政への負担となつたためではないかと考えられる。

第二章 淑姫御守殿の経営状況

前章では、將軍姫君の婚礼が家斉期から変化したことを述べた。

この章では、その家斉娘の淑姫を事例としてとりあげ、姫君の婚礼とその後の生活費についてみていきたい。

淑姫は寛政元年（一七八九）におの方を母に、家斉の第一子として誕生した。同年、尾張徳川宗睦⁽²⁹⁾の嫡孫（治行子）の五郎太と縁組したが、翌年に五郎太の病気を理由に離縁となった。その後寛政八年に一橋徳川治国の嫡子愷千代⁽³⁰⁾と縁組し、同年十一月十五日に結婚が行われた。その後、愷千代の尾張家養子入りにより、淑姫も尾張家へ入興した。

第一節 尾張藩財政状況と御守殿入用

尾張藩は九代藩主宗睦の時代の宝暦・明和期に風水被害や飢饉が続き、年貢の歳入不足に加えて復旧土木や救恤のために支出が増大し、赤字財政となっていた。そこで幕府や城下の富商から借金をしたり、家中一統に増上米を課したり、検見を改めたりするなど増収に努めたが、借財は増える一方であった。

藩の借財は明和四年（一七六七）から八年にかけての期間で二万二万両に及んでいた。さらに寛政元年、同三年には調達金が五千両

を越え、藩債総額が一年間の藩収入に接近するほどの額になっていた。そのため寛政四年には調達金を無利子化して、総額二十二万五千五百兩だった調達金を十五万九千八百兩まで縮めた。さらにこの残高を償却する策として米切手の発行に踏み切るなど、藩財政は非常に緊迫した時期であった。⁽³²⁾

このような財政状況に加えて、尾張徳川家では宗睦の嫡子や嫡孫、さらには養子までもが次々と死去し、継嗣がない状態となっていた。そこで一橋家の愷千代が尾張家に養子入ることが決定した。前述したように愷千代はすでに淑姫と結納も済ませていた。そのため愷千代の養子縁組が仰せ出されると同時に、淑姫もいずれば尾張邸へ入興の筈と仰せ出された。この翌年の寛政十一年九月愷千代は元服し、従三位中将に任じられ、名を斉朝と改めた。これをうけて同年十一月十五日淑姫は市谷邸に入興した。

先述のとおり、淑姫入興にあたって尾張藩は幕府から拝借金を受けている。それだけでなく、寛政十一年には淑姫入興後の御守殿入用の分として、三年間幕府から七千兩が払われることが決定した。⁽³³⁾この七千兩という数字は、種姫の事例を踏襲している。それが次の史料三である。

【史料三】『御触書天明集成』二八二九（天明七年七月）

桑原伊予守え

種姫君様当冬御入興ニ付、紀伊殿ニて入用向も相増候処、兼て御勝手向御不如意之上、去年不作にて多分之損毛、旁御難決之旨御願被仰立候間、種姫君様え紀伊殿より御手当之儀、

御勝手向御繰合相直候迄、御時節柄之儀ニは有之候得共、格別之思召を以、今年より三ヶ年之内、金七千兩ツ、御手当被遣候旨被仰出候、右金高之外ハ、紀伊殿方ニて入用之積ニ候間、重て被仰立等無之様可被相心得候、委細之儀は、桑原伊勢守より可申達候、

右之通、紀伊殿家老え相達候間、可被得其意候、

七月

種姫が紀伊徳川家へ入興したのは天明七年（一七八七）十一月二十七日であるので、史料三は種姫の入興の前に出たものである。ここでは紀伊徳川家の「御勝手不如意」を認め、種姫への紀伊家からの手当の分のうち、七千兩を三年間だけ幕府が出すという内容となっている。三年間というのは、「御勝手向御繰合相直候迄」の条件に相応する年月とみなされたのだろう。

この史料からうかがえることは、姫君入興後の入用は年間七千兩程度であったという点である。それも藩側が仕度する分である点に留意しなくてはならない。

参考までにはかの御守殿の事例をあげておきたい。まず伊東多三郎氏⁽³⁴⁾が紹介している峯姫御守殿をみると、文政八年（一八二五）の入用は文金二千六百五十九兩余、文銀三百三十七枚（以下切り捨て）、總四百五十九貫（以下切り捨て）で、金に換算すると二千九百五十八兩であったという。内訳は部門ごとにとまとめてあり、「御賄方」でおおよそ七百六十兩、「御普請方」でおおよそ五百七十兩、「御倉屋」が四百三十五兩、「御置方」で百九十兩余、などと続いている。な

お、見積もり金をみると、文政十年は二千九百十一両、天保元年では二千六百三十八両となっていた。

つぎに溶姫御守殿をみる。天保十四年（一八四三）の入用は金一万八千四百二十二両であった。その内容は、御手元金・御召服御用・御召服地渡染縫并慰用・足袋・化粧道具墨紙御守切類御入用・年中上被進被遣被下神仏への御供并登城入用・御付女中被下金并内証抱女中金奥廻り入用・年中前田家男女江被下入用・御膳初炭薪等台所入用・日用品奥廻り入用・作事方入用・御付女中宛行諸渡り物・人足賃金・前田家から女中并用人などへ贈物・前田家の扶持方入用となっている。

これらはどちらも藩の史料からとったものである。よって、ここにはない項目で幕府からの手当によって賄うような部分もあった可能性がある。また両方をくらべてわかるように、それぞれ異なる項目があがっているため比較は難しいが、御守殿の入用が年に一万両ほどかかっていたことがわかる。

第二節 御守殿入用

i 合力金

前節では御守殿に対する藩の支出と、その補助に幕府からの手当をとりあげた。では姫君や御守殿への収入はどのようなものだったのか。

まずあげるのは合力金である。入興にあたり姫君には幕府からの合力金がつけられた。合力金とは古くは化粧料とも呼ばれたもので、姫君が結婚するにあたり、結婚後毎年決まった額が幕府から支払わ

れるものである。その額は「年々、金子三千両、米五百俵」で固定していたようである。淑姫も入興が確定した寛政十一年八月に前記の額の合力金が決まっている。

合力金は女中の給料をさすというが、女中にかぎらず、姫君や將軍の妻たちにも支給されていた。延享二年（一七四五）勘定所作成とみられる「御勝手向御用定」（酒井家記録）には、月光院、養仙院、竹姫、利根姫、御部屋様、法心院、蓮浄院ほか女中などの合力が書き上げてある。その内容を、次の表三にまとめた。

【表三】「御勝手向御用定」より、合力等支給項目

月光院 （家継生母）	御合力、御扶持方、御賄仕切銀、御広敷江相詰候役人賄料、女中御合力米金御扶持方五菜銀人足雇代等
養仙院 （綱昌養女八重姫）	御合力、呉服代、御膳代、御賄料、御賄御細工方御仕切金、女中御合力米金御扶持方五菜銀
竹姫 （土呂宗養女）	御合力
利根姫 （土呂宗養女）	御合力
御部屋様 （家重側室）	御合力、女中渡
法心院 （家宣側室）	御合力、御扶持方、御賄仕切、御広敷江相詰候役人賄料、小破修復料、女中御合力米金御扶持方五菜銀人足雇代等
蓮浄院 （家宣側室）	御合力、御扶持方、御賄仕切、御広敷江相詰候役人賄料、小破修復料、女中御合力米金御扶持方五菜銀人足雇代等

参考文献二「御勝手向御用定」（酒井家記録、『江戸幕府財政史料集成』上、大野瑞男編、吉川弘文館、二〇〇八）より作成。

それぞれの人の項目をみると、月光院・法心院・蓮浄院はほぼ同じで、養仙院は少し項目数が多い。竹姫・利根姫は合力のみである。このうち、月光院・法心院・蓮浄院は家宣の側室で、月光院は家継

の生母である。また、養仙院は綱吉養女八重姫、御部屋様は家重側室のお幸である。合力金の額は、月光院が金五千両・米五百俵、養仙院が金三千両・米五百俵、竹姫と利根姫が金三千両・米五百俵、御部屋様が金五千両・米五百俵、法心院と蓮浄院が金五百両・米五百俵となっている。将軍生母、姫君、現將軍の側室、前將軍の側室という区分で合力の額が異なっていることがわかる。

なお養仙院は綱吉の養女で、元禄十一年（一六九八）六月十三日に水戸徳川吉孚と結婚したが、宝永六年（一七〇九）に吉孚が死去したため落飾して養仙院を名乗った。もともととは竹姫や利根姫同様、將軍家の姫君として結婚した人物であるが、延享二年段階では竹姫や利根姫よりも多数の支給を受けている。この差は八重姫が落飾していることに関わると思われるが、詳細な分析はまた別の機会に行いたい。

淑姫御守殿では合力金の決算額を毎年幕府へ報告していた。そこでは三千両を使い切ることなく、残金をつくって運用する姿がみえるが、詳しくは後に述べることにする。

ii 膳所入用

淑姫御守殿での入用として、膳所入用がある。これも合力金同様、毎年幕府へ報告されていた。次の史料四はその一例である。

【史料四】『御守殿諸書付留』文化四年二月十八日

卯二月 小笠原和泉守

河尻甚五郎

岡松八右衛門
金沢瀬兵衛
村垣左太夫
松山惣右衛門

淑姫君様御膳所去寅年一ヶ年分御入用書付

淑姫君様 御台所頭

淑姫君様御膳所御入用去寅正月より同十二月迄壹ヶ年分
合、金千貳百九拾六兩壹分余

内訳

金六百拾四兩貳分余 定式 御入用

是ハ、御朝夕御三度目御膳御用并定式御祝向、御高盛御雛

御用、其外諸品御入用、

金六百八拾壹兩三分余 臨時 御入用

是者、御膳御好外御菜并朝夕五人前宛、且御用人改ニ而不

時廻り廻り物其外被為進被下物共、諸色御入用、

内

金八拾八兩貳分余 別臨時 御入用

是者、御守殿御立寄并御三家方其外御入ニ付、諸色御入用、

去々廿年正月より同十二月迄 壹ヶ年分 金千三百七拾七兩三六分余

外、金百兩余閏八月分相除去寅年壹ヶ年分御入用

差引

金八拾壹兩貳分余 去寅年御入用 少

右者去寅年正月より十二月迄壹ヶ年分淑姫君様御膳所御入用尾州賄所買上直段を以取調、且去々丑年一ヶ年分と差引仕候処、書面之通御座候、以上、

卯二月 檜原与兵衛

これは淑姫御台所頭檜原与兵衛の差出となっており、小笠原和泉守ら勘定奉行・勘定吟味役らへとまわされたものである。ここでは淑姫御守殿での日常の食事のほか、將軍御立寄時の料理代なども含めた総額が書き上げられている。このなかの文言をみると、「淑姫君様御膳所御入用尾州賄所買上直段を以取調」とあり、淑姫御守殿の膳所で使うものは尾張藩賄所で買い上げていたようである。

【表四】御膳所入用

年	入用合計	内訳（定式入用）	内訳（臨時入用）	前年比
文化二年一年分	一四七七兩三分余	――	――	――
文化三年一年分	一二九六兩一分余	六二四兩二分余	六八一兩三分余	▲八一兩二分余
文化四年一年分	一三三三兩余	六二五兩一分余	七〇七兩三分余	△三六兩三分余
文化五年一年分	一四四六兩二分余	七〇八兩二分銀一一匁余	七三七兩三分銀五匁余	△一一三兩二分余
文化八年半年分	八七六兩一分余	四二三兩二分銀一〇匁	四五三兩二分銀一三匁	――
文化九年半年分	七七〇兩余	――	――	――
文化一〇年半年分	八一九兩一分余	三七〇兩一分銀一四匁余	四五八兩三分一三匁余	△五九兩一分余
文化一一年半年分	七七九兩一分余	三五六兩二分余	四二二兩三分余	▲五〇兩余
文化一二半年分	七七四兩余	三六七兩一分銀一四匁余	四〇六兩二分銀二匁余	▲五兩一分余

『御守殿諸書付留』より作成

幕府へ提出された膳所入用取調の書き上げのうち、判明するものをまとめたのが表四である。

これを見ると、文化八年からは半年分の報告となっているが、おおよそ御守殿の一年間の膳所入用は千三百兩から千六百兩ぐらいであったことがわかる。

表三でみたように、姫君には賄料が与えられていない。しかし史料四の賄分の決算報告が幕府へ提出され、勘定奉行らに送られていた。この意味については、今後さらに検討していきたい。

Ⅲ 尾張藩負担分の賄金

淑姫入興時に尾張藩が幕府から拝借金を受けたことは前述した。これは名目としては淑姫入興直後の出費が増えがちな時期に対しての手当であった。その後文化六年になり、「御勝手向難波」を理由

に、年三千兩ずつ五年間の手当を得ることとなった。⁽³⁸⁾
 同じ年に史料五が御用人よりでている。

【史料五】『御守殿方留』文化六年十月廿一日

尾州家老江相達候書付写

淑姫君様御用人

此度、備前殿より御書付を以被仰渡候御趣意⁽⁴⁴⁾御座候ニ付、御守殿御入用高之内、先達而御引請ニ相成候者千六百五拾兩目当高之内、猶又省略之致シ方可有之哉之段被仰聞候得共、右目当高を以御引請相成候迄、追々減方出来可致⁽⁴⁵⁾丈⁽⁴⁶⁾者吟味、諸其節迄茂、追々御掛合之上、御承知ニ茂可有御座通りニ有之、一駄当御守殿拙者共取調候御入用之儀者、御入輿前、於御本丸赤坂御先格江突合せ、口々吟味之儀、諸色直段等、御本家本途直段等より見合、夫々御先格より内訳直段引下ヶさ⁽⁴⁷⁾、其上赤坂御守殿之節より当御守殿之儀者、格別御事多被為在候得共、御入用者何れ御先格より多分の増方ニ相見候處、誠ニ日々押束御本丸より被為成進候御賄御入用高、御先格之通り壹ヶ年七千兩ニ被仰渡、其節も取調候處、御先格御入輿十一月ニ有之候處、共御手繰之致し方も如何様ニも可生候哉ニ相見評處、当御入輿之儀戊十一月ニ有之、御賄金者纔壹ヶ月半之御趣意を以、千五百兩相渡り、右を以御初年より品々勘弁之上仕払致候之處、御不足相立候儀ニ付、

(後略)

史料五は淑姫の御用人から尾張家老へ送られたもので、尾張藩が負担する御守殿賄料について、八千六百五十兩を目安高としてほしいと要望している。

これは幕府からの手当ではなく、もともと尾張藩の負担分のうちでの予算増額と思われる。そしてこの賄金も「尾州方御賄金惣御入用中上候書付」として、毎年御用人から幕府へ決算が提出されている。

【史料六】『御守殿諸書付留』文化七年三月二十九日

一覽仕候

午三月

柳生主膳正

小笠原和泉守

金沢瀬兵衛

松山惣右衛門

梶野平九郎

篠山十兵衛

淑姫君様去巳年尾州方御賄金惣御入用中上候書付

淑姫君様巳年御賄金目当高

金八千六百五拾兩

金八千四百貳拾四兩三分

銀三匁貳分三厘貳毛五絲

内(付札)「目当高八千六百五拾兩ト

差引

金貳百貳拾五兩貳朱

銀四匁貳分六厘五毛五絲

巳年減

黄金三枚

壹枚二付凡貳拾兩替

此金六拾兩

金七千七百五拾兩貳分貳朱

銀五匁壹分七毛五絲

銀九百拾五枚

凡兩ニ六拾四匁替

此金六百拾四兩

銀五匁六分貳厘五毛

外別臨時御入用金銀共

一、金四百六拾七兩貳分

銀五匁七分九厘貳毛五絲

是者

西丸御婚禮御祝儀、

(中略)

其外金々餘時之物惣御入用

一、金貳百六拾兩壹分 銀貳匁八分五厘

是者、去巳三月御立寄ニ付 御上ヶ被進被下金銀并諸

買上物惣入用

右者巳年中淑姫君様御賄金尾州取扱惣御入用書面之通御座

候、以上

午三月

福村理太夫

石野三右衛門

表五は史料六の「尾州方御賄金惣御入用申上候書付」をまとめたものである。まず目当高が示され、次に惣入用が記され、入用が各貨幣でいくらずつであるかを内訳に記してある。これとは別に臨時入用という枠が二つにわけて書き上げてある。一つ目は御三家・御三卿をふくむ將軍家の人々の儀礼や慶事での祝儀となっている。これらは御守殿の入用の内訳としてあげられているので、御三家である尾張藩の関係というよりは、淑姫の関係によるものと考えられる。二つ目は家齊の御立寄における入用である。ここでは一回の御立寄でおよそ二百五十兩前後の入用となっていた。

淑姫の関係での贈答品や將軍の御立寄による臨時入用は、ほぼ毎年七百兩ほどかかっており、定式の「惣入用」と合計すると目当高の八千六百五十兩を千兩以上も上回る年もある。このことから賄金は御守殿の定式入用のみを想定したものであるといえる。

第三節 公金貸付

淑姫御守殿の収入として、幕府からの合力金があったことは前述した。この合力金について『御守殿方留』をみると、毎年三月から五月の間に「淑姫君様去年御合力金御入用申上候書付」という書付が幕府へ提出されている。差出は淑姫御用人で、勘定奉行や勘定吟味役が一覧し、承付をつけている。これをまとめたのが表六である。

この表をみると、合力金からの出費はだいたい年間千三百兩〜二千五百兩弱となっている。

文化 8 年	文化10年	文化12年
金8650両 金8303両1分 銀 7 匁2厘 黄金3枚(1枚20兩替で金60兩) 金7595両2分2朱 銀3匁2分7厘 銀964枚(兩に64匁替で金647兩2分2朱 銀3匁7分5厘)	金8650両 金8491両 銀1匁5分9厘7毛5絲 黄金3枚(1枚20兩替で金60兩) 金7810兩3分2朱 銀6分6厘 銀923枚(兩に64匁替で金620兩2 朱 銀9分3厘7毛5絲)	金8650両 金7761兩1分2朱 銀1匁5分2厘5毛 黄金3枚(1枚20兩替で金60兩) 金7166兩2分 銀5匁2分7厘5毛
金648兩2分2朱 銀3匁2厘 淑姫君様御床揚祝儀 友松様文姫君様御髪置祝儀 保之丞様盛姫君様御誕生 尾張中納言殿初御入部 水戸少将殿御任官 水戸順姫殿鄰姫殿京都江御婚礼 田安鏝姫殿御紐解鉄姫殿御髪置並 御出生祝儀 一ツ橋松之助殿御袍瘡御酒湯濟祝儀 英姫殿御紐解且御出生祝儀 清水菊千代殿御袍瘡御酒湯濟祝儀 右ニ付 御上ヶ被進被下品々其外 金々餘時之分惣御入用	金734兩1分 銀4匁8分2毛5絲 公方様御前厄 大納言様御有卦入 御台様御水痘 御簾中様御袖留并御着帯御安産 竹千代様御誕生 峯姫君様御有卦入 保之丞様御袴着祝儀 要之丞様田安江御贅養子被仰出 候ニ付 和姫君様御誕生 紀伊中納言殿赤坂屋敷御引移 右衛門督殿御有卦入 菊千代殿御袴着且御有卦入 一ツ橋斬姫君様御鉄漿初且御有 卦入 一ツ橋御出生 田安達姫殿御有卦入 栄姫殿御鉄漿袖祝儀 日光御門主上京ニ付 右御上ヶ被進被下品々其外金々 餘時之分	金472兩3分2朱 銀5匁6分3厘2毛5絲 日光御神忌 御簾中様御産祝儀 式部卿殿御官位御元服祝儀 浅姫君様御鉄漿初祝儀 元姫君様御宮參祝儀 文姫君様御宮參并御紐解祝儀 和姫君様・溶姫君様御誕生 銀之助様初御誕生祝儀 久五郎様・仲姫君様御誕生 達姫君様御色直祝儀 近衛家參向并逗留
金947兩 銀6匁3分9厘 淑姫君様御袍瘡御酒湯濟祝儀ニ付御上 ヶ被進被下金銀並諸御買上物惣御入用		金288兩2分 銀7匁9分4厘 去亥四月御立寄ニ付御上ヶ被進 被下金銀并諸御買上物惣入用

【表六】合力金入用

年	高	惣入用	元金差引
文化 6 年	金 3000 両	金2012兩2分 銀2匁3分	金987兩1分2朱 銀5匁2分
文化 7 年	金 3000 両	金2037兩3分 銀2匁7分7厘	金962兩2朱 銀4匁7分3厘
文化 8 年	金 3000 両	金2498兩3分 銀14匁2分3厘	金500兩3分2朱 銀8匁2分7厘
文化10年	金 3000 両	金2302兩2分 銀3匁	金697兩1分2朱 銀4匁5分
文化12年	金 3000 両	金2044兩 銀2匁1分3厘	金955兩3分2朱 銀5匁3分9厘7毛

「御合力金御入用申上候書付」『御守殿諸書付留』より作成

【表五】尾州方御賄金惣入用

年	文化 6 年	文化 7 年
目当高	金8650両	金8650両
惣入用	金8424両3分 銀3匁2分3厘2毛5絲	金8187両3分 銀5匁9分9厘
内訳	黄金3枚(1枚20兩替で金60兩) 金7750兩2分2朱 銀5匁6分2厘5毛 銀915枚(兩に64匁替で金614兩 銀5匁6分2厘5毛)	黄金3枚(1枚20兩替で金60兩) 金7488兩2朱 銀5匁9分9厘 銀952枚(兩に64匁替で金639兩2分2朱)
外別臨時御入用金銀共 1	金467兩2分 銀5匁7分9厘2毛5絲	金455兩3分 銀5匁1分
使途内訳	西丸御婚礼祝儀 淑姫君様御実名御拝領 菊千代様御結納祝儀 浅姫君様御袖解祝儀 虎千代様御賀養子被仰出候祝儀 峯姫君様御髪置祝儀 先姫君様初御誕生日祝儀 友松様御誕生并御色直祝儀 千代姫君様御誕生并御色直祝儀 保之助様御誕生祝儀 尾張中納言殿御任官済候祝儀 水戸宰相殿初而御国許江御充足ニ付被達 田安益千代殿御袴召祝儀 田安鐸姫殿、猶姫殿御髪置祝儀 以上ニ付御上ヶ被進被下品々其外金々餘時之物惣御入用	御有卦入ニ付御本丸西丸江御上ヶ 大納言様御婚礼済祝儀 菊千代様清水屋形江御移徙 元姫君様御髪置祝儀 友松様御誕生日祝儀 文姫君様御誕生日祝儀 保之丞様御色直祝儀 要之丞様御誕生日祝儀 水戸宰相殿御参府ニ付被進 田安銳姫殿・猶姫殿御宮参 田安鐸姫殿御髪置祝儀 維君殿御袖留祝儀 以上ニ付御上ヶ被進被下品々其外金餘時之分、惣御入用
外別臨時御入用金銀共 2	金206兩1分 銀2匁8分5厘	金231兩 銀3匁3分
使途内訳	御立寄ニ付 御上ヶ被進被下金銀并諸費上物惣入用	御立寄ニ付 御上ヶ被進被下金銀并諸御買上物惣御入用

「尾州方御賄金惣御入用申上候書付」『御守殿諸書付留』より作成

その残金は「郡代附」へ貸し付けていたことが、次の史料七から判明する。

【史料七】『御守殿方留』文化三年十二月三日

御守殿附御貸付金高申上候書付

享和三亥年閏正月

郡代附江

一、金二千両

御貸附

同年十二月

同

一、金千五百両

御貸附

文化二丑年正月

同

一、金五百両

御貸附

同三寅年正月

同

一、金千両

御貸附

同年十二月

御貸附役所江

一、金五百両

御貸附

合金五千五百両

右者御守殿附御合力金御遺残之分、是迄郡代附江御貸附ニ差出申候処、猶又此度御遺残之内金五百両、御貸附役所江御貸附ニ相成候ニ付、金高書面之通御座候、此段申上候、以上

寅十二月

福村理太夫

石野三右衛門

この史料は淑姫御用人の福村理太夫と石野三右衛門から幕府へ提出されたもので、貸付役所に「御除金」を渡してあることを証明す

る手形の写を添えて提出された。

貸付役所とは幕府の公金貸付を行う役所のことである。⁽³⁹⁾ 淑姫御守殿の時期である文化三年～十四年は馬喰町御用屋敷で公金貸付を行っていた。馬喰町御用屋敷詰代官は、中村八太夫、大貫次右衛門、竹垣三右衛門、伊奈友之助であった。この四人の名前は淑姫御守殿御除金貸付の手形（「御守殿附御除金利金請取手形写」）の作成者としてあらわれる。

その貸付手形をまとめたものが、表七である。淑姫御守殿では享和三三年に二千両を貸付けたのをはじめとして、文化三年からは毎年五百両ずつ貸付けていた。

このような貸付について、安祥院の事例が飯島千秋氏の論文⁽⁴⁰⁾でとりあげられている。安祥院は九代將軍徳川家重側室のお遊喜の方で、御三卿清水家の祖となった重好の生母でもある。宝暦十一年（一七六一）の家重死去後に落飾して安祥院と号したのち、西丸下の新屋敷へ移った。安永元年（一七七二）屋敷が焼失したことにより、清水邸に逗留したのちに桜田御用屋敷に移り、浜御殿へ移った。なお、安祥院は寛政元年四月に死去するまで、幕府から三千八百四十八両と九百五十俵余が宛行われていたとされる。

飯島氏によると、宝暦十二年から天明七年までの実際の安祥院の収入は三千六百二十五両前後で、対して支出は四千両弱と、経営としてはぎりぎりだったという。また、安永期前に清水家から借金をしたことで、利息返済のために赤字状況が続くようになる。その赤字補填の足しとするために、関東郡代伊奈の支配地に七百両を貸し付けて利殖を図っていたのである。

【表七】御守殿付貸付金高

(単位：両・分)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計
貸付年	享和三亥 年閏正月	享和三亥 年十二月	文化二丑 年正月	文化三寅 年正月	文化三寅 年十二月	文化五辰 年二月	文化五辰 年十一月	文化六辰 年十一月	文化七午 年十一月	文化八未 年十一月	
元金	2,000	1,500	500	1,000	500	500	500	500	500	500	
文化3年	180	135	45	82.2							442.2
文化4年	—	—	—	—							—
文化5年	180	135	45	90	45	(*1) 41					536.1
文化6年	180	135	45	90	45	45	(*2) 48				588.3
文化7年	180	135	45	90	45	45	45	(*3) 52.2			637.2
文化8年	180	135	45	90	45	45	45	45	(*4) 45.3		678.3
文化9年	180	135	45	90	45	45	45	45	45	(*5) 52.2	727.2

	⑪	⑫	合計
貸付年	文化九申 年十一月	文化十酉年正月	
元金	500	(*7) 8000	
文化10年	(*6) 52.2	720	772.2

	⑬	⑭	合計
貸付年	文化十一戌年正月	文化十二亥 年十一月	
元金	(*8) 9000	500	
文化11年	810	—	810
文化12年	—	—	—

	⑮	合計
貸付年	文化十三子年正月	
元金	(*9) 10500	
文化13年	(*10) 945	945

- *1 文化五年二月から十二月まで。閏月除いた十一ヶ月分。
 *2 文化五年十二月から文化六年まで十三ヶ月分。
 *3 文化六年十一月から文化七年十二月まで十四ヶ月分。
 *4 文化七年十一月から文化八年十二月まで一年一ヶ月分。
 *5 文化八年十一月から文化九年十一月まで一年二ヶ月分。
 *6 文化九年十一月から文化十年十二月まで一年二ヶ月分。
 *7 ①～⑩、文化十年500両元金貸付分を合算。
 *8 ⑪と⑫、文化十一年500両元金貸付分を合算。
 *9 ⑬と⑭、文化十二年十一月1,000両元金貸付分を合算。
 *10 文化十一年正月から十二月まで一ヵ年分。

「御守殿附御貸付金高申上候書付」『御守殿方留』より作成。

淑姫御守殿も安祥院と同様に、貸金をしてその利息を御守殿経営の足しにしていたと思われる。また、この貸付に当てた資金は合力金の黒字分であることから、合力金に関しては、御守殿側の裁量でどのようにも動かせるものであったことがわかる。

小括

第二章では淑姫御守殿の事例をもとに、寛政・文化期の御守殿の経営の一端を明らかにできたと思う。すなわち、淑姫の入奥以前から尾張藩は財政難であり、御守殿入用を充分に賄うのが不可能な状態であった。尾張藩は御守殿入用を理由に幕府の拝借金を受けるなど負担減少を図っていた。

御守殿入用の内訳をみると、定式入用はほぼ安定していて、將軍御立寄や贈答儀礼などの臨時費といわれる部分が目立っている。將軍姫君として將軍家近親の人生儀礼や冠婚葬祭、年中儀礼に関わるため、その分贈答品も大量であった。

このように年間で莫大な入用を必要とする一方、御守殿でも合力金に黒字を作り、それを元に公金貸付に出資するなど、経済的な負担の減少に取り組んでいた様子がうかがえる。

おわりに

將軍姫君の結婚・婚礼が家斉期から変化したこと、そこには藩と大名家の経済的な問題が関わっていたことを述べた。今回は名称や衣服の変化を対象にした。今後さらに婚礼の変化を追うのであれば、婚礼調度や御守殿の規模など一つ一つの姫君の婚礼を詳細に検証す

る必要があるだろう。

御守殿入用についても、今回取り上げたものは幕府へ報告されたものばかりであったため、データにかたよがりがある。藩財政への影響を視野に入れつつ、より実態解明のためのデータを探していかなければならないだろう。

本稿の前半において検証したように、家斉娘の峯姫からはまずまずの「省略」が行われ、婚礼や御殿の名称も変えられる。それらが実態としてどれほどの変化があったのか、今後は本稿の事例を踏まえつつ取り組んでいきたい。

註

- (1) 松尾美恵子「近世武家の婚姻・養子と持参金——大名神原氏の事例——」『学習院史学』一六号、一九八〇年。高橋博「近世中期における大名婚礼交渉の側面——久保田・松江藩交渉と奥附家臣」『論集きんせい』第一六号、一九九四年。稲垣知子「近世大名の家格と婚姻——御三家を事例として——」『愛知学院大学大学院法研会論集』十二ノ二、一九九七年。同「近世大名の家格と婚姻——再論——一般大名の場合——」『近世近代の法と社会——尾張藩を事例として——林董一博士古稀記念論文集刊行会編、清文堂出版、一九九八年。
- (2) 柳谷慶子「武家社会と女性」『日本の時代史十六 享保改革と社会変容』大石学編、吉川弘文館、二〇〇三年。大森映子『お家相続——大名家の苦闘』角川選書、二〇〇四年。
- (3) 畑尚子「尾張徳川家の奥女中——十二代藩主斉荘御簾中・貞徳院と御付女中を中心に——」『徳川林政史研究所研究紀要』四〇、二〇〇六年。高橋博「大名家の奥附に関する一試論」『学習院史学』四四、二〇〇七年。
- (4) 近世武家社会で「姫君」と称されるのは原則として將軍家の娘だけで

ある。大名家の娘は「姫様」とされた。なお大名家の娘が將軍の養女となつた場合は、江戸城に入ったときに姫君呼称の触書が出る。

- (5) 松平春嶽「前世界雜誌稿」(松平春嶽全集編輯發行会編『明治百年史叢書 松平春嶽全集(一)』原書房、二四七頁)

- (6) 「御守殿」(村井益男執筆)『国史大辞典』吉川弘文館

この箇所の記述については、市岡正一『徳川盛世録』に同様の説明があるため、これを根拠としているのではないかと推測する。

- (7) しかし藩内においては、徳川將軍家の姫以外の藩主正室に対しても御守殿という呼称を用いていることがある。両者の使い分けについては今後の検討課題としたい。

- (8) 將軍家齊の娘。水戸徳川斉脩室。

- (9) 伊東多三郎「御守殿の生活費」『日本歴史』二九二、一九七二年。

- (10) 大塚英二「光友夫人死去に伴う公儀付人の召返しについて」『徳川林政史研究所研究紀要』二七、一九九三年。

- (11) 水室史子「大名藩邸における御守殿の構造と機能——綱吉養女松姫を中心に——」『お茶の水史学』四九、二〇〇五年。

- (12) 「御守殿方留」は、文化三年十月〜文化十三年十二月晦日までの淑姫の御守殿に関する御用留。「御守殿諸書付留」は、文化三年〜十四年八月までの諸書付の控え。「御守殿方留」から幕府や尾張藩、あるいは御守殿内の役人や女中等へ出された公式書類のみを取り出して、分類したものである。

- (13) 高柳真三・石井良助編『御触書集成』(寛保』『宝暦』『天明』『天保』上下) 岩波書店、一九七六〜七七年。石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』一〜別巻、岩波書店、一九九二〜九七年。

- (14) 齊木一馬、岩沢愿彦『徳川諸家系譜』全四巻、続群書類従完成会、一九七〇〜八四年。

- (15) 婚礼の儀式上、入興と婚姻の規式は別のものであるが、判明する限り、すべて入興当日に行われているため、表一では婚姻日を省略した。

- (16) 市岡正一『徳川盛世録』(東洋文庫四九六)、平凡社、一九八九年

- (17) 伊勢貞丈「貞丈雜記」(東洋文庫四四四、四四六、四五〇、四五三)、平凡社、一九八五〜八六年

- (18) 「万石以上ならびに高家・交代寄合の家士もまた著用す。」(『徳川盛世録』二七〇頁)

- (19) 「徳川盛世録」二七二頁

- (20) 「御触書天明集成」五二八

- (21) 小普請支配梶久三郎の娘。峯姫のほか、菊千代(のちの斉順)、晴姫を産んだ。家齊の側室で御部屋様と呼ばれたうちの一人。天保三年十月二十六日死去。

- (22) 「御触書寛保集成」一〇七五 をさすか。

- (23) 註(一)に同じ。

- (24) 大口勇次郎「寛政—文化期の幕府財政——松平信明政権の性格——」『日本近世史論叢』下巻、吉川弘文館、一九八四年。

このなかで氏は当該期を五つの区切りで次のように説明している。

i 寛政元年〜同十年

寛政改革がはじまる時期で、この間の経常費収支は年平均で三万両の黒字となるものの、十年間のうち三年が禁裏普請入用と日光東照宮修復費用のため赤字決算の時期。

ii 寛政十一年〜文化二年

i と比べて黒字幅が減少し、年平均で三万両の支出過剰となり、七年間のうち四年が河川修復や寛政十一年の東蝦夷地直轄化による入用のために赤字の時期。なお、このときの河川修復の費用は、国役金や上納金で補填している。

iii 文化三年〜文化八年

財政悪化が一層進行し、経常費までに赤字が生じてくる。この期間は年平均で二万両の赤字となり、六年のうち五年も赤字となった。この理由は、二つめの時期から引き続いている河川普請と、買上米代によるもの

である。

iv 文化九年の儉約令

それまでの儉約令よりもさらに厳しく、経常費（役所経費・扶持合力金など）、臨時費（貸付金・普請金など）も支出節減を求め、全体的な支出の二割減を目標とさだめた。

v 文化九年～文化十二年

文化九年の決算は先々年と比べて、経常支出が一八・七％減、経常費の収支差額は十万五千両となった。つづいて文化十年、十一年も黒字となったが、文化十二年には大幅な赤字に転落した。

- (25) 大平祐一「江戸幕府拝借金の研究——幕藩関係の一考察——」『法制史研究』二十三、一九七三年

- (26) 松尾美恵子「幕府拝借金と越後高田藩政——天明期の幕藩関係——」『徳川林政史研究所研究紀要』昭和五十一年度、一九七七年

- (27) 『御触書天明集成』二八二九

- (28) 前掲の大平論文によると、拝借金認可の基準として「続柄」があり、將軍と近い家筋は婚礼や家計困窮による貸与が許されることが多かったという。

- (29) 先手の平塚伊賀守為喜の娘。家斉の側室。淑姫のほか、瓊岸院、竹千代、綾姫を産んだ。寛政五年九月十五日御内証之御方と称すべき旨が仰せ出された。天保六年正月十一日死去。

- (30) 徳川治行。宗睦弟義敏（高須松平）の子。幼名源次郎。宝暦十年（一七六〇）生。明和八年（一七七二）高須松平家相続、義柄を名乗る。安永三年（一七七四）八月十五日家治へ初御目見。同六年正月二十五日宗睦養子となり、治行と名乗る。同九年婚姻。寛政五年（一七九三）死去。行年三十四。

- (31) 徳川五郎太。天明元年（一七八二）十月十五日生。寛政六年（一七九四）九月三日死去。行年十四。

- (32) 所三男「尾張藩の財政と藩札」（児玉幸多監修、林董一編『地方史研

究叢書6 尾張藩家臣団の研究』名著出版、一九七五年）

- (33) 『御日記』寛政十一年六月十八日（徳川林政史研究所所蔵）

- (34) 伊東氏前掲論文

- (35) 溶姫は家斉の二十一女。文政十年に前田斉泰と結婚した。

- (36) 水室氏前掲論文

- (37) 『御触書天保集成』五七五九

- (38) 『御触書天保集成』五七八二

- (39) 竹内誠「馬喰町貸付役所の成立」『研究紀要』徳川林政史研究所、一九七三年。飯島千秋「近世中期における幕府公金貸付の展開」『横浜商大論集』一八一二、一九八五年。同「馬喰町貸付役所における公金貸付の実態」『横浜商大論集』二八一二、一九九四年。

- (40) 飯島千秋前掲論文、一九八五年

- (41) 明和二年の屋敷焼失と、それに伴う清水家逗留、桜田御用屋敷移住などの諸経費増加がその後の借金の直接的原因と推測される。

- (42) 持参金を貸付にだして利殖を図る事例は、松尾美恵子「近世武家の婚姻・養子と持参金——大名神原氏の事例——」『日本家族史論集』婚姻と家族・親族』吉川弘文館、二〇〇二年に見られる。